OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	紫の上に投影された空蟬像
Author(s)	胡, 秀敏
Citation	語文. 1991, 56, p. 10-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68826
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紫の上に投影された空蟬像

胡　秀敏

一

紫の上は藤壺の姪であるという資格で、光源氏の世界に登場した人物である。彼女は六条院「春の御方」と称賛され、「藤裏葉」の巻では明石の女御の入内に付き添い、御輦車を許されるなど女御に準ずる待遇を受けるまでとなった。このような紫の上と受領階級の人妻である空蟬との間には一見したところ、何の関連性もないように思われる。皇孫の出自であり、光源氏の愛を一身に集めている女性と、一介の老受領の後妻とでは、身分に格段の差がある。容姿も一方は源氏物語において最高の理想美をもつ女性であり、他方は「目すこし腫れたるここちして、鼻などもあざやかなる所なうねびれて、にほはしき所も見えず、言ひ立つればわろきによれる容貌」（「帚木」）というふうに、決して美しいとは言えない。またこの二人の女性はそれぞれ一方は物語の華やかなヒロインであり、他方は脇役的な存在である。しかしながら、物語本文をよく読んでいくと、「帚木」「空蟬」「夕顔」の三帖に描かれている光源氏と空蟬の恋物語が、すぐあとに登場してくる長篇人物の紫の上に大きく関わっていることに気がつく。このことについて、物語における光源氏の行動意識、そして彼の愛に対する二人の女性の心情表現或は反応を検討することによって、空蟬物語と紫の上物語との間に認められる関連性を明らかにしたいと思う。

「帚木」の巻の前半部分、いわゆる「雨夜の品定め」は、五月雨の夕暮れに行われたもので、それが中の品の女性への遍歴の導入であることは早くから指摘されているし、たしかにそうであると思う。この「雨夜の品定め」の直後、光源氏がはじめて出会う女性が空蟬である。彼女は故衛門の督の娘で、生前父は宮仕えに出そうとまで考えたことがあったが、老受領の伊予の介の後妻となっているだけに、左馬頭の定義からするならば、空蟬は典型的な中の品の女性になってくる。そしてこの空蟬のあとに出会った夕顔は故三位中将の娘であり、わが身の置きどころもなく、頭中将の許から身を隠さざるを得ない人であった。その出自運命を考慮するならば、彼女も中の品の女性である。光源氏の空蟬、夕顔との恋は、空蟬の頑固な拒絶と夕顔の死によって、いずれも悲恋物語となったのである。この二人の中の品の女性との接触によって開眼させられた光源氏は、や

がて藤壺ゆかりの若紫を引き取ることに決心した。この若紫奪取行為は一体どう理解すべきであろうか。まず空蟬との出会いから見ることにしよう。

光源氏は品定めの翌晩、左大臣の屋敷に赴くが、中神の塞りで、方違へすることになる。そこで、「紀伊の守にて、親しくつかうまつる人の中川のわたりなる家なむ、このころ水せき入れて、涼しき蔭にはべる」（「帚木」）という進言で、紀伊守の屋敷へ赴くことになったわけである。そして、空蟬の住む紀伊守邸と、そこから連想する光源氏の心理について、物語は次のように語る。

水の心ばへなど、さるかたにをかしくしなしたり。田舎家だつ柴垣して、前栽など心とめて植ゑたり。風涼しくて、そこはかとなき虫の声々聞こえ、蛍しげく飛びまがひて、をかしきほどなり。人々、渡殿より出でたる泉にのぞきゐて、酒飲む。主人もさかな求むと、こゆるぎの急ぎありくほど、君はのどやかにながめたまひて、かの中の品に取り出でて言ひし、このなみならむかしとおぼしいづ。（「帚木」）

紀伊守邸はこのように、ある程度風流をこらしているものと描かれている。しかしそれは光源氏を驚嘆させるまでには至らなく、ただ「雨夜の品定め」における左馬頭の三階級論、つまり中の品重視論を思い出させ、この程度の家が推称された中の品なのだろうと関心をそそられるのみであった。その後、実際に空蟬と逢って、左大臣の屋敷に帰還した光源氏が空蟬のことを、

すぐれたることはなけれど、めやすくもてつけてもありつる中の品かな、隈なく見集めたる人の言ひしことは、げに、とおぼしあはせられけり。（「帚木」）

と追憶し、「雨夜の品定め」の思想に従って空蟬を中の品の女性だと考えていることは明らかである。

さて、光源氏と紫の上との出会いは北山での垣間見から始まり、その場面では、

あはれなる人を見つるかな、かかれば、このすきものどもは、かかるありきをのみして、よくさるまじき人をも見つくるなりけり、たまさかに立ち出づるだに、かく思ひのほかなることを見るよ、と、をかしうおぼす。（「若紫」）

とある。この「すきものども」は、「雨夜の品定め」における左馬頭たちを指すものかどうかは、成立論上の問題点であるところだが、空蟬、或は夕顔との恋の体験に関連して、この光源氏の心情は、若紫に対する情念が上の品である姫君に対するものでなく、中の品の女性に対するものであることを示し、①空蟬との恋物語の延長線上に引き起こした情念であることは否定しがたいであろう。ここにおいても、「雨夜の品定め」に論及された中の品の女性を想起することで、空蟬と紫の上に対する光源氏の意識に共通するものが感じられるのである。つづいて若紫を引き取る光源氏の心理描写に、

さても、いとうつくしかりつる児かな、何人ならむ、かの人の御かはりに、明け暮れのなぐさめにも見ばやと思ふ心、深うつきぬ。（「若紫」）

とあって、藤壺の形代として思うのであるが、容貌の似ていることだけがその契機であるにすぎない。この若紫とのめぐりあいの心情的契機に、藤壺のことが言われるのが通説となっている。もちろん、それは光源氏の心を動かした最も重要な原因ではある。しかし紫の上が藤壺の姪であるという素姓が判明したのは、垣間見のあとであ

ったことを忘れてはならない。当時の紫の上の実態は孤児同然であった。光源氏の若紫奪取行為も、このような彼女の境遇だからこそ可能だったのである。したがって、若紫を引き取るという光源氏の行動意識は、藤壺に対する限りない憧憬からくる一種の衝動であると同時に、空蟬のような中の品の女性に対する色好みの行為と同質のものとも考えられるのである。この空蟬と紫の上をめぐる光源氏の同じ心中思惟は、少なくとも若紫に出会った当初は、彼女を単なる藤壺の身代りとしてだけでなく、空蟬物語の延長線上において、若紫を発見したことを興味深く思っていることを物語るであろう。そうすると、空蟬によって拒否された光源氏の満たされぬ恋心、色好みの冒険は、その当時の境遇からは同じ中の品の女性だと考えられる紫の上に代っていき、藤壺への傾倒と空蟬への執着という二つの軸の交錯する所に、紫の上が登場してきたのだと言えないであろうか。このような空蟬と紫の上とのつながりは、物語におけるその後の描写からも窺うことができる。そこで次に、光源氏の愛に対する空蟬と紫の上の態度に視点を移してみよう。

二

空蟬は、物語に登場してくる多くの女性が光源氏に愛される事に喜びを見出しているのに対し、それを拒むという自分の意志を持ちあわせた女性である。光源氏に対する空蟬の心理が如何に変化していったかについては、光源氏が訪れる度に述べられている彼女の言葉から知ることができる。まず、寝ているところの空蟬を自分の部屋に連れ込む途中、中将の君に出くわした時の様子は次のように描かれている。

「やや」とのたまふに、あやしくて、探り寄りたるにぞ、いみじくにほひみちて、顔にもくゆりかかるここちするに、思ひ寄りぬ。あさましう、こはいかなることぞと思ひまどはるれど、聞こえむかたなし。なみなみの人ならばこそ、あららかにも引きかなぐらめ、それだに人のあまた知らむは、いかがあらむ。心も騒ぎて、したひ来けれど、動もなくて、奥なる御座に入りたまひぬ。障子をひきたてて、「暁に御迎えにものせよ」とのたまへば、女は、この人の思ふらむことさへ、死ぬばかりわりなきに、流るるまで汗になりて、いとなやましげなる。(「帚木」)

空蟬を奪い去る光源氏を目の前にしても、中将の君は、相手が普通の身分の男ではないので、どうすることもできなく、徒らに光源氏のあとを追ってきたが、光源氏は中将の事を全く問題にもせず、ただ一方的に暁方の迎えを命じて障子を閉めてしまう。彼の態度には、相手に有無を言わせぬような傲慢さがあり、さらには空蟬を、普通の手続を必要としない卑しい女性と見下げる意識があらわに見えるのである。ここにおいて、光源氏の強引さ、中将の君の無力さ、そして空蟬の悔しさが実によく描かれているのである。この場面と重ねるように書かれているのは、源氏物語全篇を通じて、僅かに一つしかない。「若紫」の巻におけるそれである。父兵部卿の宮邸に若紫が翌日に引き取られると聞いて、光源氏は急いで左大臣の屋敷から若紫邸に赴く。寝ているところの若紫を抱きかかえて出かけようとする場面は、次のように描かれている。

大輔、少納言など、「こはいかに」と聞こゆ。「ここには、常に

もえ参らぬがおぼつかなければ、心やすき所にと聞こえしを、心憂くわたりたまふべかなれば、まして聞こえがたかべければ。人ひとり参られよかし」とのたまへば、心あわたたしくて、

「今日はいと便なくなむはべるべき。宮のわたらせたまはむには、いかさまにか聞こえやらむ。おのづからほど経て、さるべきにおはしまさば、ともかうもはべりなむを、いと思ひやりなきほどのことにはべれば、さぶらふ人々苦しうはべるべし」と聞こゆれば、「よし、後にも人は参りなむ」とて、御車寄せさせたまへば、あさましう、いかさまにと思ひあへり。若君も、あやしとおぼして泣いたまふ。（「若紫」）

ここでは、「帚木」の巻の場面と全く同じような構図で、光源氏、乳母の少納言、そして若紫の立場が語られていることに注目したい。若紫が父宮に迎えられるつもりでいる少納言たちは、光源氏の突然の行動に驚きととまどいを感じる。〝そのうちにご縁がおありでしたら、ご一緒にもおなりになれましょうが〟という少納言の懇意を全く無視する光源氏は、この邸での自分の立場の強さには自信があるので、堂々と若紫を抱きかかえて連れ出そうとするのである。そして先程の中将の君に命じた口調で、今度は若紫の女房たちに「人ひとり参られよかし」と命令したのである。このような光源氏の傍若無人の強引さは、空蟬との場面を連想させ、若紫も所詮空蟬と同じように、光源氏の思うままに扱える女性だと見做されていることを示しているのではなかろうか。

さて、空蟬の寝室に侵入し、彼女をわが部屋まで運びいれて「あはれ知らるるばかり情々しく宣ひ尽し」た光源氏にたいして空蟬は、

「うつつともおぼえずこそ。数ならぬ身ながらも、おぼしくたしける御心ばへのほども、いかが浅くは思うたまへざらむ、いとかやうなる際は、際とこそはべるなれ」とて、かくおしたちたまへるを、深くなさけなくうしと思ひ入りたる……。（「帚木」）

という有様であった。傍線部分の「かやうなる際は、際とこそはべるなれ」という言葉は難解で諸説一致しない。「花鳥余情」は、これを「上臈下らうのきはをいふ也」と、身分のことを言っているのだと注釈している。それに対して中世の多くの注釈書は、「花鳥余情」の説を否定し、夫がいる身であることを指しているのだと主張している。しかし江戸時代の終り頃に作られた石川雅望の「源註余滴」は、

花鳥の説によるべし○夕顔の巻にうつせみをこひ給所にかやうのなみ〳〵迄はおもほしかゝらざりつるをと有てきはといへるもなみといへるも同類の詞也きはゝきはといへる詞末摘花の巻に源の末つむをかいまみさせよと命婦に仰給ふ所にいはゞ俄に我も人もうちとけて語ふべき人のきはゝきはとこそあれと見えたり花鳥の説によるべし

と、用例をしめしながら身分のことであると解釈し、「花鳥余情」の説を肯定している。たしかに源氏物語において「きは」は人について用いている場合は多く身分のことを言っているのである。「末摘花」の場合を含めて、この空蟬の言葉について「花鳥余情」の解釈に従ってさしつかえないと思われる。空蟬の発言は彼女に対する光源氏の扱い方に、激しく抗議、非難したものだと考えられる。彼女の強い抵抗の論旨としては、自分は人の数にも入らないつまらない身ではあるが、光源氏の強引な態度は女心というものを無視して

いるし、そこには本当の愛など見出せないというのであろう。たしかに対等の関係にある男女の場合には、寝ている女を自分の部屋へ連れ込むような無体な行動はしない筈である。空蟬が泣き寝入りせず、こうして強く抵抗するのも、光源氏の行為には軽い身分の女と見下げられた態度があらわに見えた②からにほかならない。

このような視点からすれば、奪われるようにして、二条院の人となった紫の上に対する光源氏の行為も、空蟬に対するそれと同じように紫の上を対等の関係にある女性だと思っていないことを物語っているのではなかろうか。事実、当初の紫の上は、上の品である葵の上方から〝二条院には人迎えたまふなり〟（「紅葉賀」）とあたかも空蟬や夕顔が光源氏に迎えられたらそう言われたであろうような扱いを受ける③。乳母の少納言が光源氏の強引な行為をなんとか阻止しようとしたのも、こうした形で男の家に迎えられることは紫の上の人生に大きな傷をつけかねないと考えたからであろう。当時の上流貴族の結婚制度は、招婿婚であった。妻が夫の家④に引き取られるのは、妻の身分が低いか財力の乏しい場合である。紫の上の場合、もし父宮の屋敷に引き取られたとしたら、或は光源氏のような高貴な男性を通わせるような身分の姫君になっていたのかも知れない。たとえそうでなくても、当時の保護者である少納言は、若紫が二条院に引き取られるのではなく、光源氏が通ってくるのを期待していたのである。まだ京の自邸にいた時、光源氏が若紫を訪れて一夜を共に過したことがある。普通の場合、それは結婚したというふうに理解することも可能である。だから、結婚した次の夜に光源氏のかわりに惟光が訪ねてきた時、少納言は「あぢきなうもあるかな。たはぶれにても、もののはじめにこの御ことよ。」（「若紫」）と、光源氏のいい加減な態度を不満に思うのである。この少納言の言葉には、若紫のおかれた環境と身の上が如何におぼつかなくても、同じ結婚するならば、光源氏が通ってくることを望んでいる姿勢が現われているのである。しかし光源氏は乳母の期待どおりにはしなかった。空蟬を自室に、紫の上を自邸に連れ去る光源氏の自由奔放な態度は、この二人の女性に対する光源氏の基本的な姿勢に由来するものだと考えられ、空蟬も紫の上も、光源氏にとってなんの手続も必要としない女性であることを物語っているのだと思われる。

三

空蟬を自室に連れ去った後、光源氏が言葉の限りを尽くして彼女に愛情を訴える。光源氏の言動に対する空蟬の応酬には、深い心理描写を見ることができる。「数なぬ身ながらも」という空蟬の抗議の言葉には彼女の強い自尊心が表われている。そしてその自尊心は、光源氏から再度の逢瀬を求めてきた手紙を読んでの空蟬の心を記したところにも見える。

いとかく品定まりぬる身のおぼえならで、過ぎにし親の御けはひとまれるふるさとながら、たまさかにも待ちつけたてまつらば、をかしうもやあらまし。（「帚木」）

空蟬はいまのような境遇ではなく、自分の屋敷、つまり自分の入内を考えてくれていた実家にいる頃であったら、たまさかに光源氏を待ち迎えることもできたのにと思うわけである。自分が既婚者だからというのではなく、空蟬は光源氏が自分の屋敷へ通うというような関係で逢うことを考えているのである⑤。当時の男女関係で、女を

対等関係と見なしている場合、男が女の屋敷に通っていくのは当然だとされていたし、源氏物語の中でも、明石の君が光源氏の屋敷に行くことをためらったのもその誇り高さのためであろう。空蟬の場合、わが屋敷の中ではあるが、光源氏の寝所に連れ込まれたのだから、傷つけられて強く拒み通したのである。

では、紫の上の場合はどうであろうか。二条院に引き取られた当時は、あくまでも親代りに後見するということであって、光源氏が紫の上を女として見なすのは新枕が交された時点からだと考えるべきである。葵の上が亡くなって、その喪も明けるか明けないうちに、紫の上との新枕が語られる。

男君はとく起きたまひて、女君はさらに起きたまはぬ朝あり。人々、「いかなればかくおはしますならむ。御ここちの例ならずおぼさるるにや」と見たてまつり嘆くに、君はわたりたまふとて、御硯の箱を、御帳のうちにさし入れておはしにけり。人間にからうして頭もたげたまへるに、引き結びたる文、御枕のもとにあり。何心もなく、ひきあけてと見たまへば、

あやなくも隔てけるかな夜をかさね

さすがに馴れし夜の衣を

と、書きすさびたまへるやうなり。かかる御心おはすらむとは、かけてもおぼし寄らざりしかば、などてかう心憂かりける御心を、うらなくたのもしきものに思ひきこえけむと、あさましうおぼさる。(「葵」)

この場面は、はじめて女として扱われた時の紫の上の驚きと怒りとくやしさが、実によく描かれているものである。傍線部分の〝かかる御心おはすらむ〟について『細流抄』は、

紫上の心には源の真実の子に成給ひて自然いかなるありつきをもさせ給ふへきと思ひ給ひしにおもひの外に思給也

と解釈している。親と思って頼っていた光源氏が突然自分を女として扱ったわけで、歌と結び文をつけられても、返歌のための硯まで用意されていても、紫の上は歌を返そうとせず、一日中頭から着物をかぶり泣き濡れて、御帳台を一歩も出ようとしない。この時の紫の上には言葉こそなかったが、この態度自身が光源氏に対する無言の抵抗であり、不服なのである。光源氏の行為に対して「あさまし」と思い、抵抗する紫の上の姿には、空蟬の精神に通じるものがあるように思えてならない。或はこの場面、紫の上の若さからの困惑ぶりとも見えるのかも知れないが、しかし紫の上はすでに十四才である。女三の宮も十四才で光源氏と結婚し、明石の姫君もほぼその年齢で入内したと考えられるため、紫の上の結婚は必ずしも早いわけではない。光源氏から教育を受けた紫の上も立派な一人前の女性になっている筈である。このことは、同じ光源氏とはじめて契りを結んだあとの女三の宮の場合と照らし合わせると、一層はっきりしてくるのである。紫の上も、もし父兵部卿の宮の屋敷に引き取られ、宮の姫君として光源氏を迎えるような形になっていたら、彼女も女三の宮と同じように決して光源氏に抵抗の姿勢を見せたりはしなかったであろう。したがって、この場合の紫の上の態度は、やはり光源氏の扱いに対する一種の抗議だとしか考えられない。要するに、養女として二条院へ連れ出されるのはまだいいとしても、いざ女と男の立場に変わると、空蟬の場合と同じように、このような逢い方では、紫の上も決して承知しようとしないのである。

空蟬は強い自尊心と明晰な自己認識によって、光源氏を拒み自ら

を保ろうとする意志の強い女性である。平安時代における女房達の物語享受のあり方を伝えている『無名草子』が、源氏物語の人物評において、

　権の宮、さばかり心強き人なめり。世にさしも思ひ留められながら、心強くてやみ給へるほど、いみじくこそおぼゆれ。空蟬もその方は、むげに人わろき。のちに尼姿にてまじらひ居たる、また心づきなし

と、類なき光源氏の愛を拒み通した空蟬を「げに人わろき」と評している。同じく「心強き人」でありながら朝顔の姫君の場合は「いみじ」とされ、なぜ空蟬の場合は「むげに人わろき」とされるのか。これはのちに尼姿で二条東院に引き取られたことを「心づきなし」と言っていることとも無関係ではない⑥ように思われる。しかし空蟬は光源氏の邸に引き取られたことを喜んでいたのであろうか。「初音」の巻では、華やかな紫の上の姿とはうらはらに、仏道に深く帰依していく空蟬の退場場面が描かれている。光源氏が二条東院に住む空蟬を訪問する場面は次のようにある。

　青鈍の几帳、心ばへをかしきに、いたくゐ隠れて、袖口ばかりぞ色異なるしもなつかしければ、涙ぐみたまひて、「松が浦島を、はるかに思ひてぞやみぬべかりける。昔より心憂かりける御契りかな。さすがにかばかりの睦びは、絶ゆまじかりけるよ」などのたまふ。尼君も、ものあはれなるけはひにて、「かかるかたに頼みきこえさするしもなむ、浅くはあらず思ひたまへ知られはべりける」と聞こゆ。「つらきをりをり重ねて、心まどはしたまひし世の報いなどを、仏にかしこまりきこゆるこそ苦しけれ。おぼし知るやかくいとすなほにしもあらぬものを

と、思ひ合はせたまふこともあらじやはとなむ思ふ」とのたまふ。かのあさましかりし世の古事を聞き置きたまへるなめりと、はづかしく、「かかるありさまを御覧じ果てらるるよりほかの報いは、いづこにかはべらむ」とて、まことにうち泣きぬ。（「初音」）

光源氏は「賢木」の巻で出家した藤壺への贈歌で使った「松が浦島」という賛辞をもって目の前にいる尼姿の空蟬をほめる。しかしその一方では「さすがにかばかりの睦びは、絶ゆまじかりけるよ」と結局は自分の庇護のもとにある空蟬の幸運を得意げに語る。それに対し、空蟬は「かかるかたに頼みきこえさするしもなむ、浅くはあらず思ひたまへ知られはべりける」と、わが身の後身となった光源氏に感謝の意を述べる。しかし感謝しているものの、空蟬は「かかるありさまを御覧じ果てらるるよりほかの報いは、いづこにかはべらむ」と涙を流す。夫に先立たれた空蟬は、あの時の紀伊守、いまは河内守となっている義理の息子の露骨な好色心が厭わしく、世俗に背く道を選ぶほかなかったのである。その当時、世を捨てた出家生活とはいっても、強固たる経済基盤がなくてはならぬことであった。あれだけ光源氏を拒み続けた自分がこのような尼姿を光源氏の目にさらさねばならない苦しみに耐えかねて空蟬は涙を流したのである。光源氏の庇護を受けているのは幸福と見えようが、内実は「かかるありさまを御覧じ果てらるるほかの報いは、いづこにかはべらむ」と言い切っているのだから、空蟬の激しい悲しみの表れと言えよう。対座している光源氏と空蟬はともに涙を流しているものの、空蟬の涙には、光源氏に解し得ない無力さ、悔しさといった辛酸な思いが含まれているに違いない。

この光源氏と空蟬の会話場面とよく似たものが「若菜下」の巻における光源氏と紫の上のそれである。光源氏がわが半生を述懐するとともに、紫の上の幸福を語り聞かせたとき、紫の上は、

のたまふやうに、ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど、心に堪へぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける。(「若菜下」)

光源氏はいささか独りよがりで自分の庇護のもとにある紫の上の幸運を語り聞かせる。それに対し、紫の上は「のたまふやうに」とたしかに光源氏の言葉を受けとめて、同じ考え方に落ち着き、さらには感謝しているようにも見える。ところが、すぐあとの「心に堪へぬもの嘆かしさのみうち添ふや」という言葉には光源氏の考え方とは別に、紫の上の厳しい人生認識が集約されている。光源氏の言葉は紫の上の深層をあまりにも、察知し得ない言である。[7]孤児同然の境遇で引き取られた紫の上の存在基盤は、光源氏の独自の価値観によるものであって、世間の公認するものではない。それ故に紫の上は光源氏から恩恵を受ける一方、屈辱と苦しみに耐えねばならぬ人生を送ることになる。光源氏の愛に頼るしか生きようのないことに苦悩する紫の上の姿は空蟬のそれであり、そして幸運とも不幸ともいえるような二人の女性の人生史が光源氏との関わりの中で収束していくのである。「初音」の巻に見られる空蟬の辛酸にみちた人生回顧の姿に重ねて「若菜」の巻における紫の上の姿を見ることができるのではないであろうか。

四

さて、源氏物語において、上の品の女性は藤壺に、中の品の女性は空蟬に代表されているのである。物語に描かれたすべての女性をこの二系列に分けることができるとすれば、紫の上はこの二人の要素を兼ね備えた人物として造型されているように思われる。ただ紫の上のあり方も、物語で終始一貫しているわけではない。しかし藤壺への限りない情念と中の品への深い興味が、光源氏に若紫を引き取らせたことは動かない事実であるし、このことが紫の上にとって生涯の傷みであることは、朝顔の姫君や女三の宮事件などで厳しく回顧されるところである。彼女にあっては、頼るべき肉親を持たず、藤壺のゆかりであることが光源氏世界に登場した唯一の資格なので、藤壺の「影」に左右される宿命を甘受せざるを得ないのである。

物語における紫の上がはじめて自己の存在基盤に不安を感じたのは、新枕から三年の歳月が流れた頃である。「賢木」の巻では、藤壺との逢瀬が拒絶され心の乱れが頂点に達した光源氏は、この藤壺への狂熱を鎮めるため、雨林院に参籠する。その時紫の上に贈った歌が、

朝茅生の露のやどりに君をおきて
四方の嵐ぞ静心なき

である。この歌は、桐壺院の死による急激な政治情勢の変化を踏えて詠まれているものである。それにひきかえ、紫の上の返歌、

風吹けばまづぞ乱るる色かはる
浅茅が露にかかるささがに

は、光源氏に関わる紫の上の嘆きを発想の起点としている。これは

自分以外の女性に対する思慕のために焦燥し、動揺している光源氏の内面を実に鋭く察知するもの[8]だと思う。このように紫の上は光源氏世界に登場して早くからも藤壺の影による不安の中に置かれ、心の世界に孤独を抱くようになったのである。そしてこの藤壺の隠然たる力は、彼女が亡くなったあとも紫の上を脅かしつづけた。「朝顔」の巻では、藤壺を中心に女君達の人物評が行われ、その巻末に描かれる、共寝しながらもそれぞれ各自の思いに耽る二人の姿が、あまりにも印象的である。光源氏は「宮の御事を思ひつつ大殿籠り」し、亡き藤壺の姿を夢に見て、促される。傍らの紫の上に声をかけられても、光源氏はその声も耳に入らず、ただ「いみじく口惜しく、胸のおき所なく騒げば、おさへて涙も流れ出でにけり、今もいみじく濡らし添へたまふ。」ばかりであった。「女君、いかなることにかと思すに、うちもみじろかで臥したまへり」という状態で、紫の上は光源氏の有様に驚きながらも真相を知ることができなかった。光源氏は明石の君、朝顔の姫君、朧月夜、女三の宮それぞれとの関係の場合、結局は紫の上に打ちあけた。しかし藤壺とのことのみは打ちあけるわけにはいかない。藤壺への思いに浸っている限り、紫の上は決して光源氏の世界に入り込むことが許されないのである。[9]

藤壺は物語第一部において原動力とも言うべき存在であった。その「ゆかり」としての紫の上もその成長と共に光源氏の世界へという栄華の階段を上っていく。しかし光源氏の心を動揺させる藤壺の力による紫の上の傷みも、その心の奥深くに沈潜しつつ存続していったのである。彼女が自己の宿命を見つめ、賢く振る舞うようになるのは、実に藤壺が物語から姿を消してからである。そして「若菜」の巻以降では、もっぱら紫の上は処世のあり方に悩む姿を中心に描かれ、空蟬的な人物という一面が一層顕著に現れてくる。[10]次は光源氏から女三の宮の降嫁を予告された時の内面叙述である。

心のうちにも、かく空より出で来にたるやうなることにて、のがれたまひがたきを、憎げにも聞こえなさじ、わが心に憚りたまひ、いさむることに従ひたまふべき、おのがどちの心よりおこれる懸想にもあらず、（中略）いとおいらかにのみもてなしたまへり。（「若菜上」）

自分の地位が脅かされる不安に直面しながらも、女三の宮への嫉妬や光源氏への怨恨を抱くのは当らぬとし、この事態を自分自身の運命と甘受して、すべてを自己の内部で処理しようとしているのである。

空蟬は身分の程を強く意識する女性であり、彼女の光源氏に対する心情は「うき身の程」「数ならぬ身」など、光源氏の接近の度に繰り返されている。「身の程」をよくわきまえ、そして強い自尊心をくずさなかったからこそ、空蟬は光源氏に対して賢く振る舞い、わが身を守ることに成功したのである。紫の上の人物造型も、このような空蟬物語の流れに乗って完成されているように思う。とくに女三の宮の降嫁によってもたらされた危機意識から、処世の方法をあみ出して生きようとする点において、空蟬と共通の軌跡を歩んだことになる。空蟬の光源氏から退くための賢さに対して、紫の上は光源氏のそばにありつづけるための賢さだと言えるであろう。

たしかに光源氏から受ける待遇について、空蟬と紫の上とでは、格段の差がある。しかし紫の上の優遇は藤壺ゆえの栄達であり、光源氏を領導する藤壺の影響下にある紫の上像を物語は一貫して描いている。藤壺は光源氏の物語の中で、時には背景に退くことはあっ

ても、つねに最も重大な位置を占めている。光源氏にとって藤壺こそ理想の女性であって、紫の上はあくまでもその身代りでしかあり得なかったのである⑪。したがって光源氏から受ける待遇に格段の差があるにもかかわらず、紫の上を引き取る光源氏の行動意識、空蟬と紫の上にまつわる描写の類似、女として扱われた時の紫の上の態度など、紫の上の姿には、空蟬の精神に共通するものを見出せることは否定しがたいであろう。物語は光源氏と藤壺の秘密の恋の影響下にある紫の上、つまり「藤壺のゆかり」としての紫の上、そして中流階級の女性である空蟬の精神をたしかに受け継がれている紫の上の姿を描き、言いかえれば、藤壺であり、空蟬である紫の上像を描いたように思われる。藤壺と空蟬的な要素を兼ね備えたからこそ、光源氏は紫の上を自分の屋敷に据えることができ、生涯かけて藤壺を恋しつづけることができたのではないであろうか。

注

①森　一郎氏「源氏物語の主題と主人公」（『源氏物語作中人物論』〈笠間書院　昭和五十四年十二月〉所収）
②増田繁夫氏「空蟬と夕顔―処世のかしこさとつたなさ―」（『源氏物語の探究』第五輯〈風間書房　昭和五十五年五月〉所収）
③今西祐一郎氏「紫の上登場―若菜」（『国文学』學燈社　昭和六十二年十一月号）
④塩塚千穂氏「空蟬論―帚木・空蟬を中心に―」（『語学と文学』　昭和六十一年三月号）
⑤前掲論文②と同じ。
⑥田中まゆみ氏「空蟬像の変遷―人物論にみる享受史の試み―」（『女子大文学』32　昭和五十六年三月号）
⑦関根慶子氏「「若菜」より「御法」にいたる紫上」（『源氏物語の探究』第八輯〈風間書房　昭和五十八年六月〉所収）
⑧石坂妙子氏「紫の上の悲劇性と藤壺」（『新大国語』第七巻　昭和五十六年九月）
⑨前掲論文⑧に同じ。
⑩前掲論文②に同じ。
⑪拙稿「藤壺のゆかり」の光と影（『待兼山論叢』文学篇第24号　平成二年十二月）

附記…源氏物語の本文引用は新潮古典文学集成による。

――本学大学院博士後期課程在学――